巻頭言

所長　今枝 正行

当センターは、発達支援の専門的相談機関として13年目を迎えることとなりました。ひとえに地域の皆さま、保育園、幼稚園、学校、保健所など関係諸機関の皆さま、そして何よりセンターをご利用いただいたお子さんとご家族の皆さまのご理解とご協力のたまものと心より感謝申し上げます。

センターだより第9号は田中真介先生（京都大学大学院　人間・環境学研究科准教授）のご講演を聴講ノートの形式で報告する特集号です。ご講演は昨秋、名古屋の療育関係者の合同研修にお招きした時のものです。

先生は、発達（Development）とは、本来、包み込まれた未知の可能性が花開いていく過程を表すものとして、子どもたち、大人たちの発達を様々な実証、理論構成、さらには社会的実践の展開により研究をされておられます。

今回は特に乳児期から幼児期に飛躍的な発達をする段階に焦点をあてて、とりわけ1歳から2歳に起こる次の発達ステージへの挑戦する子どもたちの発達の魅力について紹介していただきました。

ご講演の中で、「人間の赤ちゃんは、哺乳瓶でミルクを飲むときも、飲むのを止めてでも相手（お母さん）を見ます。相手との気持ちのやり取りを非常に大事にする生き物です。」と言われました。社会の中では誰もが支えあって生活をしています。

先生は、日頃から子どもたちと向き合い、深く見つめておられる中で、自分を大事に温めてくれる人間関係が安心感を与え、子どもたちが持っている本来の力を発揮することで、子どもたちが自ら発達していく力を十分引き出すことができると、話してくださいました。ご講演の内容をぜひみなさまにお伝えいたしたく思いました。

講演では、多くのビデオやスライドを見せていただきました。1歳の「あやちゃん」がすべり台、はめ板や積木で遊ぶ姿を丁寧に見つめることで、子どもたちが発達していく様子がよくわかりました。また1963年に、日本で子どもたちに対する療育のさきがけとなったびわこ学園が設立されました。その映像記録の中に、初めて「心の杖」の大切さをとらえた貴重な場面が収録されていました。学園にプールを作るために、河原から石運びをする、という療育実践の場面です。

以下の記録は、聴講ノートの形式なので、ビデオなどの映像や講演内容の一部を割愛せざる得ませんでした。大変残念ですが、何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

地域の皆さまにより親しんでいただけるセンターだよりを目指しています。ご意見、ご批評をお寄せいただければ幸いに存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

子どもたちに笑顔を、お父さん・お母さんに希望を
～障害のある子どもたちの発達の魅力をとらえた保育・子育て～

講師　京都大学大学院　准教授　田中真介氏

1　はじめに

今日は、おもに１～２歳の子どもたちに焦点をあてて、その時期の発達のしくみをもとに、障害のある子どもたちを助けるにはどのようにしたらよいのかを皆さんと一緒に考えていきます。

発達研究の成果を保育・療育に活かしていくにあたっては、「発達の障害」について、二つの見方ができます。一つは「発達局面」の障害です。例えば、自閉症のある子どもたちには、相手とのコミュニケーションがとりにくいという障害の特性や特質があり、それが、その子たちのつらさにつながっている面があります。それゆえ、視覚的な支援をしたり、養育環境を本人にわかりやすいように構造的に整えるなどの発達支援が取り組まれてきました。

もう一つの見方は、「発達過程」での障害というとらえ方です。発達の機構を深くみていくと、自閉症のある子どもたちが、コミュニケーションがとりにくい、というのは、現象としての発達の局面の一つである「コミュニケーション」そのものに障害の原因があるのではなくて、発達の総合的な機構が充実していくときのプロセスのどこかに躓きやすいところがあるからで、そこに手厚い援助が十分に尽くされていないために、コミュニケーションの障害が顕在化しているととらえる必要があると考えます。発達過程への援助は、第一に、発達の構造全体に対してなされなければならないでしょう。

また、コミュニケーションの障害によって、最も大きな影響を受けるのは「自我の育ち」です。それゆえ、援助の課題として第二に重要なことは、自我の形成・拡大・充実を支えることではないかと考えています。コミュニケーションが上手くいかないことによって最も育ちにくいところを支える。相手とのつながりを作る基礎となる力を支える。

たとえ「こだわり」があるとしても、それを単にネガティブにとらえるだけではなく、発達への願いとして受けとめていくことが重要です。例えば、２歳前後の発達段階で援助を必要としている子どもたちの場合、「心の杖」を作り出して、新しいことに挑戦していきます。その心の支えが十分でないときに、こだわりや反抗などの抵抗的な行動によって自分の気持ちを伝えようとしているのではないか。そこを支える。そうすることで子どもたちは新たな力を得て、自分自身で次の発達のステージを切り開いていくことができます。

今日は、初めに１歳半の発達の飛躍のしくみについてお話しし、次に、重症心身障害療育施設である「びわこ学園」で取り組まれていた療育記録の映像から、自我の育ちと心の杖を援助して子どもたちを支えた療育活動の具体例を紹介します。

2　ヒトと他の霊長類の違い

他の動物の赤ちゃんと違う、人間の赤ちゃんの発達の大事な特質は何でしょうか。ヒトの赤ちゃんは、他の動物の赤ちゃんたちに比べると、運動面でも生理的な機能でも未発達、未成熟のまま生まれてきます。それに対して動物は、生まれて30分以内で立ち上がる赤ちゃんが多いくらいです。動物の世界では、できるだけ自立して生まれてくるのが当然の生き方ですが、人間は未熟な形で生まれ、発達も遅いことが際立った特徴となっています。その未熟さや遅さには、どのような意味があるのでしょう。

チンパンジーの赤ちゃんに哺乳瓶でミルクを飲ませている時、ほとんどこちらの目を見てくれません。人間の赤ちゃんは、おっぱいを飲む時も、哺乳瓶でミルクを飲む時も、飲むのを止めてでも相手を見ますね。お母さんがあやしかけると、また安心したようにミルクを飲みます。ヒトは、そのような**〈気持ちのやり取り〉**をとても大事にしている生き物、といえるでしょう。

また、チンパンジーは基本的に無言ですが、人間の赤ちゃんは生まれた時から産声を出します。その後も、声を出して泣いたり笑ったりします。**〈自己の感情表現の豊かさ〉**が、人間の赤ちゃんたちの重

要な特徴です。チンパンジーは、例えば、高い木などから手をすべらせて落ちて痛い目にあっても、「ウッ」といった小さい唸り声をあげたりはしますが、ほとんど声は出しません。それに対して人間の赤ちゃんは、泣いて痛みを表現するでしょう。

人間の子どもが泣くのは、例えば、お母さんが必ず助けに来てくれるからではないでしょうか。泣いたり笑ったりすることに意味があるからです。泣くことが、自分の状態を示すサイン（感情表現）になるとともに、相手に伝わることで（社会的交流）、現在の自分の状態をよりよくしてくれる可能性があります。そのようにして感情表現や言葉の力がさらに豊かになっていきます。

逆の例を考えると分かりやすいかもしれません。もし、泣いても誰も来てくれないという状況が続いたら、赤ちゃんたちはどうなると思いますか？　泣くことに意味がなくなるので、赤ちゃんは泣声が小さくなる、泣かなくなる、表情が少なくなるでしょう。例えば、ある乳児院では、虐待を受けた子どもたちを含めて、お父さんやお母さんが赤ちゃんをうまく育てられない、そんな赤ちゃんたちを受けとめていました。その乳児院の赤ちゃんたちは、共通して泣き声が小さく、表情の変化も乏しい、ということが職員から報告されていました。ですが、その赤ちゃんたちも、毎日丁寧に気持ちを受けとめてもらって、声かけをしてもらうことによって、泣き声が大きくなり、表情も豊かになっていきました。赤ちゃんたちは、相手との気持ちのやり取りが十分に保障されることによって、泣いて自己表現する力を取り戻していくことができたのでしょう。

そのようにして、自分を生き生きと表現し、自我を豊かに育てながら、相手と気持ちのやり取りをする。この自己表現と社会的な交流の力が、他の動物たちの生き方と大きく異なっています。

3　乳児期から幼児期へ　～１歳半の発達の飛躍～

（１）幼児期の発達　～全体像～

１歳前半に「１次元形成期」を迎えます。１種類の活動を生き生きと繰り返し自己表現する時期です。例えば、積木を積む、２つの器の一方に積木を入れ込む。このように、１種類の活動を粘り強く繰り返して自分を表現します。

その力をもとに、「１次元可逆期」が実現します。切り換えたり折り返したりしながら自己表現する時期。１歳半ばから後半です。例えば、積木を１つの器に入れ込むだけではなく、２つ目３つ目の器にも入れる、入れ分けるということができる。行動を自由度高く切り換えて自己表現できる時期です。

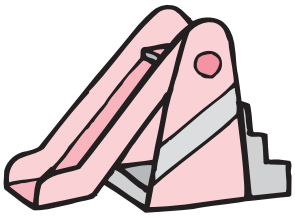
その後、２歳前後に、「大文字で描くＩ次元の活動」の時期を迎えます。**〈自我の拡大〉**の時期と対応しており、「ジブンデ！」「イヤ！」としっかりと自己主張でき始める発達段階です。それが、２～３歳で「２次元の形成期」につながります。質的に異なる２つの活動を１つにまとめあげて自己表現し始めます。**〈自我の充実〉**と連動していることが重要です。２歳前後のように、「ジブンデ！」と自己主張して、自我を拡大して表現するだけでなく、自分も相手も大事にできる。相手のことを大事に思う。そういう力が芽生えてきます。最初に、１歳代の発達の魅力を見てみましょう。

（２）あやちゃん、１歳（ビデオ映像記録より）

１歳の女児あやちゃんが、１歳１か月と、１歳半の節目を越えた１歳７か月のときのビデオ映像です。①すべり台、それから、机上の課題として、②はめ板、③８個の積木を２枚のお皿に配分、④積木つみ、これらの場面を見てください。いずれの場面でも、１歳前半と後半で明瞭な変化が表れます。以下に映像記録の要点を要約します（田中昌人・田中杉恵監修『ビデオ版　発達診断の実際　１歳児』大月書店）。

●すべり台

〈１歳前半〉：「…１歳児用のすべり台。階段側から歩いて上がるのはむずかしく、高這いで上がる。すべるための方向転換、足を前に出してすべることはまだむずかしい。お坐りの姿勢であれば向きが変える。だが、階段を立って降りようとすると、バランスをとるのが大変。降りた後には一度振り返る。お母さんに連れていってもらって再びすべり台を上がる。だがやはり、方向転換ができずにそのまま腹ばいの姿勢ですべり降りた。降りるとまた振り返って見てから、お母さんの胸に飛び



込む」

〈1歳後半〉:「歩行もしっかりして、声も言葉に。すべり台でも方向転換ができ始める。足どりも軽くなり、スロープのほうから登ることも。歌うような声。すべり台の上で立ち上がって前向きに腰を下ろし、足を前に出してすべる。「こわいよー」の声にも遊び心が感じられる。

大きなボールを持って、「いくよ、いくよ」と言いながら、すべり台を登っていく。足の指先と手を使ってバランスをとる。登ったあと、まず声を出してボールをすべらせ、足をしっかり前に出して、トントンと調整をしてから余裕をもってすべり降りる。足を前に出して前向きにすべるのが、もう当たり前になっている」

●はめ板

〈1歳前半〉:「手と比べると少し大きな円板だが、はめ板の丸のところへ入れ込んだ。次は、テスターがはめ板を目の前で180度方向転換させる。あやちゃんは元の位置に入れようとする。まだ、左右の入れ換えという方向転換はむずかしい」

〈1歳後半〉:「最初は、円板ひとつの課題。しっかり持ってさっと入れた。左右180度の方向転換に対しては、「こちらデハナイ、あちらダ」ということがわかっていて見事に応えた。次に、丸と三角と四角の課題。左手も右手とほぼ同じレベルで使う。全部入れた。はめ板を180度方向転換させても、1度お手つきしたが、すぐ切り換えた。後はお手つきなしで、三角形も前後を方向転換させて全部きちんと入れることができた」

●積木の入れ分け

〈1歳前半〉:「ひとつひとつ手のひらに力を入れてつかんで入れていく。一方へ入れ出すと、そちらに集中して入れていく。ひとつ残っていた積木を促されて、右手に持ち換えて入れ、最後に声を出す」

〈1歳後半〉:「ひとつずつの入れ分けから発展し、両手を使って一度にたくさん持って入れ分ける。たくさんと少しにした。「あやちゃんのはどっち?」と訊かれてたくさんの方をとる。これは、自我が誕生して、拡大を始めているサインのひとつ」

●積木つみ

〈1歳前半〉:「積むのでなく、両手に持って積木どうしを強くくっつけ合う。ひとつ積めて喜びの声。手を引く時に肘や手が下りてしまうので、積木がすべってなかなか積めない。しかし、積木を積むことがわかっていて、積もうとし、積めなかったこともわかっている。うまく積めると声をあげる」

〈1歳後半〉:「積木の持ち方が変わってきた。親指と中指を基本にして、指先だけを使って積木を水平にしながら、上から肘や手を上げて積木を上手に積み上げる。慎重に調整して、真っすぐに次々と積む。高くなると、上からでなく横の方から、親指と人差し指だけで積木を持って上手に積む。積んだ後も下から上まで積木を目線で追ったりする。11個積めて嬉しそうな顔。12個めで倒れてしまうが、自分で積み直し始める。

2度目も肩、肘、手首、指先の調整が見事。右手だけでなく、左手でも上手に調整して、積木を指先だけで持って積木を見ながら積み上げる。ぎこちなさがあるが4個積む。最後は気持を残してそっと倒した」

(3) 1歳半の飛躍

映像には、1歳前半から後半への特徴的な変化がよくとらえられていました。1歳前半には積木を全部入れ切る、まっすぐにお母さんの方へ向かって行くなど、ストレートに力を発揮。1歳後半になると、いろいろな面での切り換えや折り返し、姿勢の転換、また、二つの対の関係をとらえて切り換えるといった特徴が生まれました。さらには、表情の変化や豊かさが印象的でした。これらを手がかりにしながら、1歳半の飛躍を支えるポイントは何かを考えていきましょう。

❶大好きな人に向かって歩く:

乳児期後半(6〜12か月)には、例えば「はいはい」で自発的に世界を探索することができるようになって、〈自分〉と〈好きな対象〉とのあいだの絆を結ぶ力が獲得されていきます。それが親子関係の親密さ、基本的な信頼性の形成につながります。1歳代で、好きな対象に二足で歩いて行って到達することができるためには、自分と相手とのあいだでしっかりと絆を結んでいく力が不可欠です。

1歳代には、お母さんや食べ物、玩具、遊び活動など、好きなものや活動が明瞭になっていき、その

力が量的に増大していきます。相手とのつながりを作り、対象を好きになる力。そして自分が「これが好きだ」と表現できて、「モット～シタイ！」といえるような、好きのエネルギーの高まりが、１歳半の飛躍を支えます。

❷定位活動：

赤ちゃんは、10か月頃に、相手から「ちょーだいね」と言って差し出されたその手に、自分が持っている大事な物を手渡すことができ始めます。このような活動を、**〈定位活動〉**と呼んでいます。絆を結ぶ貴重な力をもとに、自分を対象に定位する力です。その力を展開することによって、子どもたちは、１歳代で、器の中に積木を入れ込む、また、積木の上に別の積木を次々と載せていく、といった**〈継起的な定位活動〉**ができ始めます。相手との絆を作った上で、そのつながりを深める活動のエネルギーの高まりです。その力が、生活場面では、例えば、ご飯をスプーンで食べるといった道具利用行動の獲得につながります。スプーンが、ただの「物」ではなくて、ご飯を食べるといったような、ある一つの目的を達するための大事な価値をもった「道具」として生かされていきます。

❸価値の発見と保存：

オモチャを駆使した遊び活動のほとんどは、物を道具として生かす活動が展開されたものとなっています。何でもない「物」の中に、いわば「価値」が発見され、生活の中で生かされる。そのような**〈価値の発見と保存〉**の力が、対象（物・相手）だけでなく、自分自身の中にある大事な価値としての**〈自我〉**を発見することにつながります。自我の育ちが、道具利用の力を高めるといってもよいでしょう。

さらには、そのような力が、多様な対象の中に共通の価値があることの発見につながって、「マンマ」や「ワンワン」など対象と対応した音声言語をもたらします。自分や他の人のあいだで共有される、共通の価値ある音声の発見です。

❹自我の芽生え～価値づける力：

配分課題で、１歳前半で一方の器に積木をしっかりと入れ切ったということは、自我が芽生えて、1人の人間としての自分自身の気持ちを行動できちんと表現でき始めていることを示しています。これはいわば**〈１の発見〉**でもあります。さらに、１歳後半のあやちゃんは、自分が〈たくさん〉でお母さんは〈少ない〉方にしました。自分に重みをつけて自分の価値を大事にできる力です。それは、**〈自我の拡大〉**の時期に入り始めていることを示します。

はめ板の場面にも、自我の育ちの特徴がよく表れていました。1歳前半は、まず、ダダコネのエネルギーを高めていっている段階。はめ板の基板が左右逆になっても、最初に円板を入れた同じ位置に入れようと何回も繰り返していました。このお手つき（位置反応）がしっかりできるということは、自我が芽生えて、ダダコネのエネルギー（１次元形成の力）が高まっていることを示しています。

❺変化を主体的に受けとめ、自分を切り換える力：

はめ板の場面では、１歳前半の入れ込みに対して、１歳後半では、はめ板の基板の左右の孔の位置が反対になったことがわかって、「コウデハナイ～コウダ」と、活動を切り換えて、反対側になっていたマルの孔の中に円板を入れました。

生活場面では、例えば、だだこねをして泣いていても、１歳後半には、気持ちを切り換えて元に戻すことができ始めます。この切り換えの力（１次元可逆操作）は、発達のしくみの中でも、とりわけ大事な力としてその子を支えます。周りが変化したことを受けとめて、自分を柔軟に主体的に切り換える力です。

切り換えの力が獲得されるためには、「自分はこうしたい」という思いを表現できて、それを受けとめてもらえる経験が必要です。そして、相手との関係の中で、自分の思いと違っていれば、「嫌だ」と表現できること。相手の指示をそのまま受け入れるだけでは、自分は受け身の存在となって、相手との対関係がとらえられず、肝心の自我が育たないからです。自分の願いを持ち、相手とは違う意図が生まれ、しっかりと自己主張できる力が発揮されること。それが自我の輪郭を明確にし、自我を生み育てることにつながるでしょう。

❻未来を期待する力：

１歳後半では、テスター（田中杉恵）が「はめ板」を提示した時に、あらかじめ反対側に視線を送りました。この視線は、あやちゃんが、次に切りかわる世界を事前に予測でき始めていることを示しています。また、はめ板の課題が終わった時など、課題が次に切り換えられるときには、「次は何かな…」といったように、あやちゃんは、テスターの手元に視線を送っていました。次のことを楽しみに期待して待つという力です。未来に楽しいことがある、ということが発達の飛躍を支えます。

❼感情表現の豊かさ：

積木を積むときや、その積木の塔が倒れた時、あやちゃんは、「壊れちゃったよ」といった、やや困惑した表情をして相手をしっかりと見ました。繊細な表情の変化。自分の気持ちを視線や表情で明瞭に表現し、また、それによって相手とのつながりをつくる。言葉が豊かになっていくための大事な前提です。はめ板の場面でも、入りにくい時などにあきらめて終わってしまうのではなく、相手に視線を送り、相手を見て自分の気持ちを伝えていました。

１歳半ばでの直立二足歩行、道具利用、音声言語の獲得と飛躍のためには、感情表現と社会的な交流活動の豊かさが実現され、その中で、対象や自分自身の内面に目に見えない価値が発見されていくことが必要です。それが次に、自分と相手（対象）の両方を価値づける力となって発展していきます。

4　自我の育ちと心の杖　～「夜明け前の子どもたち」～

（1）自我が母港から外洋へ

写真は、２歳の子どもの様子です。お母さんにしがみつきながらも、新しい課題をしっかりと見ています。右手にタオルを持っていますね。ですが、積木の課題で自分の力が十分に発揮できると、自分からタオルを放すこともできます。実際にお母さんから離れられなかった子どもたちも、２歳代でお母さんから離れつつ、ぬいぐるみなど自分が好きな物を持ちながら、新しい世界に踏み出していくでしょう。大好きなお母さんの存在を内面化し、いわば「母をモバイルする」イメージです。こうして自我が母港から外洋へと船出していきます。また一方で、「母を作り出す」ことも重要です。お母さんから一人立ちを始めながら、「新たな母」を作り出し、お母さんのことをあらためて好きになっていきます。

自閉症の子どもたちは、新しい場面が苦手だとよく言われます。ですが、何か支えになるものがあれば、新しい場面が新しい場面でなくなっていきますね。特に大事なのは、好きな友だちの存在です。自分とつながりが深い大好きな友だちができて、その友だちと一緒だったら、新しい場面も新しくなくなりますし、新しい課題にも挑戦しやすくなるでしょう。そのような多彩な「心の杖」を尊重することが、この時期の自我の育ちを支える際の大事な観点であるように思えます。

２歳前後は“ジブンデ、ジブンデ！”とか“イヤダ、イヤダ！”と、人生の中でいちばん強く自己主張する時期かもしれません。お母さんたちを悩まし、児童虐待も多い時期だと言われています。わが子の自己主張が強くてその意図を理解するのがむずかしいと、お母さんは自分を否定されているような気持ちになってしまいます。しかし、この時期の子どもたちは、自分を何らかの形で表現して受けとめてほしいと願っているのかもしれません。「反抗」する子は「反抗するエネルギーがある」。「ウロウロする」と言われる子どもたちには、「ウロウロする力がある」とも言えそうです。

（2）夜明け前の子どもたち

「第一びわこ学園」は、近江学園から発展して、障害の重い子どもたちを受けとめて1963年に開設されました。『夜明け前の子どもたち』という映画に、びわこ学園での療育活動が記録され、１歳から２歳代にかけての自我の発達のしくみを最初に発見した貴重な映像が収録されています。

その映像記録の中で、特に「心の杖」を支えにしながら頑張っている様子をとらえた「園外療育活動」の場面を見てください。「野洲川の河原から、友だちと一緒に石を運んでプールをみんなで作ろう」というテーマで行われた療育実践です。子どもたちは、心の杖を大事にしながら、ちょうど自分の中で自我を生み出していこうと頑張っていました。今皆さんの身近にいる子どもたちの様子とつながるものがあればと思います。ビデオ映像の中のナレーションの内容を要約して紹介します。

❶「心の杖」の発見

河原でたくさん石を集めて運び、最終的には東病棟の庭にプールを作ろうという計画でした。先生方が大勢こちらにつくと、病棟の内では人出が足りなくなるのですが、とても大切な授業だということで踏み切ったわけです。20分作業をして、20分休憩をするというような計画で進められました。わたくし（田中昌人）もまず、りょうちゃんと取り組みました。しかし、石を入れても立ちあがってくれません。やっと持たせても進んでくれない。なんか無理やりやらせているような、いやそうじゃないんだと思いながら、いろいろとやってみました。

最初の日は、たいへん戸惑いました。いつも紐を持っている男の子がいました。先生に聞いてみたところ、「Ｕくんはいつもこの紐を持っているので、石運び作業の中で、この紐が放せるようになら

ないだろうか」ということでした。力いっぱいやってくれる子もいます。こういうふうに、この子もやれないだろうか。期待しながら、とても不安な気持ちでした。

Ａさんは、河原に来てもホウキを放せず、なかなか石運び学習の流れに入っていこうとしません。先生に手をひかれて、ようやく行きかけたのですけれども、ホウキを、行き交う友だちに取られてしまいました。すると、あれほど柔らかかった体がとても固くなることに驚かされました。でもまたホウキを持つと動き始める。ホウキが、不思議な「魔法の杖」のような働きをしています。ただ子どもを学習に連れ込むというのではなくして、何かこうして「心の支え」になるものが、どの子どもにもあるのかな、ということを考えさせられました。―――**「心の杖」**というふうに呼んでみました。

今日は、Ｕ君は、バスに乗る時に紐を放してきたということでした。紐を持つ手がちゃんと道具を持って作業に参加しているのを見て、「心の杖」というものが、他のものに代わっていけるように、そういうふうに私たちが働きかけていかなければならないんだな、って思ったんです。でも、上手く入っていかない。何か険しい心の働きを見ました。

休憩時間、Ｕ君は、草を紐の代わりに持っています。「心の杖」というのは、急に放させようとしても、それはむつかしいんだなって、…何か徐々に置き換えていく、あるいは、自然にカサブタがとれていくように、心をしっかりしたものにしていくことが大切なんだなあ、と思いました。草から紙へ、紙から帽子の紐へと闘っていたＵ君、なかなか作業に入ってきません。

（映像：先生が紐をくれない。Ｕ君は、石運び用のカゴを放り投げる）。

私たちは、紐を持たして、何とか作業の中に入れてやろうじゃないか、と思って、「石を運ぼう。運んだら紐をあげるから」と、そんなふうにも考えてみました。…今度は学園の先生が代わりをしてくださることになりました。でもむつかしそうです。

（映像：Ｕ君は、１～２個、石をカゴに入れた。学園の先生を受け入れていた。だがその後、Ｕ君は、先生に石を手渡されるが、カゴの中に入れず、わざと外側にポイポイと捨てて行く。先生は、「向こうまで運んで行ったら、この紐をあげるから」というしぐさをして石運びを促すが、Ｕ君は腰を引いて座り込んでしまう。そのあと何とか運んだが、不承不承という感じだった）。

…それから後、私たちは、たいへん考えさせられたんです。「約束通り石を運んだから、紐を上げよう」としても、Ｕ君は、せっかく紐を渡されても、その渡された紐を捨てて、（石運び用の）カゴ（缶）も捨ててしまいました。「無条件にくれるのでなくちゃ嫌なんだ」。そんな、じらされるような形でもらったのでは納得しません。精神医学的な問題があるとは言われながらも、人間的な心の働きを読みとることができました。

「心の杖」をただ他の物に置き換えようとすることだけに一生懸命になってじらしてしまうと、Ｕ君は「心の杖」を「乗ってきたバスの中に入る」という形で、自分よりももっと大きな世界を「心の杖」にしてしまう。それではいけないというところまでは分かってきたのですが、次にどうしたらいいのか、分かりませんでした。

❷仲間同士の交流と社会的な交換性

Ｂ君は、入園当初から少し程度が高すぎていい相手がおらず、勝手なことをしたり、友だち関係が上手くできません。それは、狭い中に閉じ込められているからかもしれない。相手になる子どもがいないから、一人勝手なことをしてしまう。いい相棒が必要なのではないかと、しょっちゅう先生たちの話題に出ていました。

Ｉ君は耳が聞こえず人に気持ちが通じないもんですから、マジックで壁やガラスあちこちに自分の気持ちを描きまくっています。顔に強いチックがありますけども、何かを私たちに訴えかけているように見えました。

園外活動の場でこの二人を組ませてみよう。お互いに知らない、心の病気があり、あるいは耳が聞こえない、という関係の中で、友だちになることができるかどうか。それはたいへんむずかしいように思えたんですけども、この河原の広さが、思い切ったことをやらせることに踏み切らせてくれました。

先生がいなくても二人だけで作業ができるようになり、さらに、他の人にもちょっかいをかけていく。なるほど上手くいった、こりゃすごいじゃないか。…働くことを通して、仲間同士の関係が作られていくことを大切にしてみよう。きまりきった関係だけではなくして、その関係を他の人とも築いていけるようにしていく、そういうことで、閉ざされていた心、それが豊かになっていかないだろうか。先生たち、私たちともどもに、そういったことを話し合いました（ナレーション記録、以上）。

5　おわりに

「心の杖」を大事にしながら、自分というものを初めて生み出して、自分はこうしたいということを具体的に表現できる。そしてその力を何とか支えようと工夫されているところを見ていただきました。「心の杖」という言葉が、初めて発達研究の中に登場した場面です。自我が芽生えて拡大し、自分を大事にできる力がついていく時期、実際の年齢でいうと２歳から３歳にかけての時期に、自分の中でいろいろな形で、「新たな支え」を生み出していくこともでき始めます。

自我が拡大し、自分を表現する仕方が多様に多彩になり、自分と相手の二つの世界を大事にすることができ始めます。それが３歳から４歳の「発達的な２次元」といわれる世界を充実していくことにつながっていくでしょう。

後日談ですが、B君とＩ君は二人で一緒に石運びができるようになって、最後に別れる時には大泣きしていたということでした。友だち同士で助け合って、一つの大事なことをやり遂げることができる。そういう経験を重ねていくことによって、自分の価値と相手の価値を発見し、深く理解することができていくのではないでしょうか。

友だちや家族とのつながりの中で、自分の力を引き出して発揮させていく。田中昌人先生はそれを、**“人間のお風呂”**と表現しておられました。自分を大事に温めてくれるような人間関係がベースにあることで、安心感があって、力をのびのびと発揮できるようになります。さらには、きまりきった関係だけではなくて、いろいろな人とつながりを作って、多様な集団関係が準備されることによって、自分の持ち味を多彩に発揮していくことが可能となりますね。こうして、その子が持っている力の**〈社会的な交換性〉**を高め、豊かにしていくことができます。

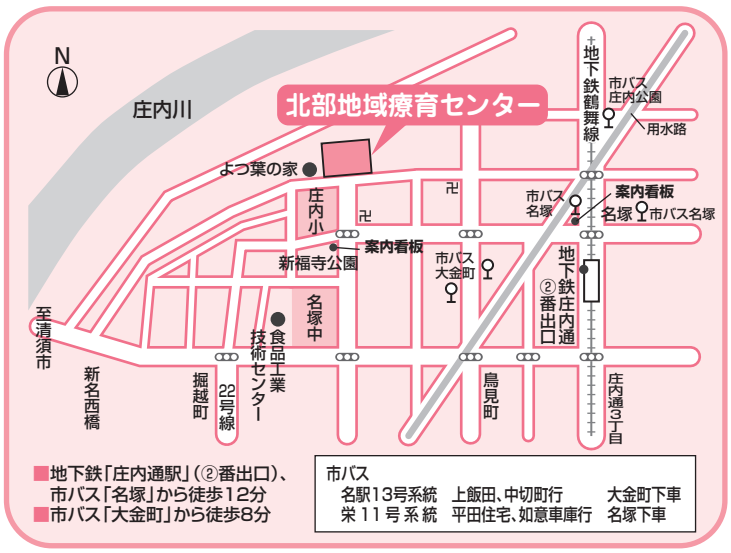
皆さんの身近な子どもたちは、どのような発達のステージに立っているとしても、つねに自分を、そして自我を大事に育てて、自分も相手も大事にしようと努力を重ねているように思います。皆さんの持っていらっしゃる良いもの、貴重な力を全部出して、これからも子どもたちのいいところ、発達の魅力を発見して、子どもたちを助けていっていただければと思います。

＊＊＊ ボランティア募集中 ＊＊＊

センターでは保育活動のお手伝いをしていただける保育ボランティアを募集しています。

◎保育活動のお手伝い
（室内の活動や、園外への散歩など一緒に活動します）
◎センター行事のお手伝い
（運動会、夏まつりなど）
◎通園児の弟妹の保育
◎教材作りや環境整備など

短期間、短時間でもかまいません。現在、学生さんから主婦の方まで活躍中です。お気軽に下記までお問い合わせ下さい。



名古屋市北部地域療育センターだより　第9号
発　行　日　2015年3月1日
編集・発行　名古屋市北部地域療育センター
〒451-0083　名古屋市西区新福寺町2丁目6番地の5
TEL（052）522-5277　FAX（052）522-5279